

『ジュリアス・シーザー』に於ける弁舌の傑作:  
マーク・アントニーの追悼演説

稲富 健一郎\*

香川県立保健医療大学保健医療学部教養部

Mark Antony's Funeral Oration:  
A Masterpiece of Eloquence in *Julius Cæsar*

Kenichiro Inatomi\*

*Department of Liberal Arts and Sciences,  
Kagawa Prefectural College of Health Sciences*

要旨

批評史初期のこの劇『ジュリアス・シーザー』についての批評は主に文体についてのものである。1601年既に、ウィーヴァーが、ブルータスへのローマの群衆の共感に反感に変えたアントニーの弁舌術を賞賛し、1784年には同様に、デイヴィスが、躊躇したり、遮ったりすることも含めて、彼の説得術に注目している。本論では、この有名な追悼演説が、A.C.ブラッドレイ、D. ウイルソン、J. ワイルダース、M. チャーニー、V. L. カーン、S.ルーシー等の論を参照しつつ、ブルータスの演説と比較され、人間性との関連に於いて、更に深く分析される。

Key Words: マーク・アントニー (Mark Antony), 追悼演説 (funeral oration), 弁舌術 (rhetoric)

\*連絡先: 〒761-0123 香川県高松市牟礼町原281-1 香川県立保健医療大学保健医療学部教養部 稲富 健一郎

\*Correspondence to: Kenichiro Inatomi, Department of Liberal Arts and Sciences, Kagawa Prefectural College of Health Sciences, 281-1 Murecho-Hara, Takamatsu, Kagawa 761-0123 Japan

## 序 文

悲劇『ジュリアス・シーザー』の中で、アントニーがどのように、強力な指導力を発揮し、シーザー暗殺後のローマの政治的混乱を取捨していったかについて、追悼演説に見られる弁舌術を中心に明らかにしている。

一般的に言って、全ての成功の秘訣は、潮時を見計らってそれに乗ることである。アントニーの軍に対する作戦計画をキャッシアスとねっている時に、ブルータスは次のように言う。

人が行うことには潮時がある。  
満ち潮に乗れば、幸運[の港]に達する。  
乗りそこなえば、人生航海は  
悲惨な浅瀬に乗り上げることになる。  
There is a tide in the affairs of men  
Which taken at the flood leads on to fortune;  
Omitted, all the voyage of their life  
Is bound in shallows and in miseries. 4.3.216-9.

ブルータスは潮 (the tide) に乗れず、自殺することになるが、アントニーはそれに乗ってローマの群衆を支配することが出来た<sup>1)</sup>。何が明暗を分けたのであろうか。

現実から遊離した理想主義者ブルータスの苦悩

アントニーの成功の原因を明らかにするために、先ず、彼の対極に置かれているブルータスについて論じる必要がある。彼は、現実的なキャッシアスやアントニーと対照的で、ハムレットのように、生来、知的、内省的、哲学的であり、善良で感受性に富み、個人的な野心を持たず、公共の善にとって正しいと思われることを実行し、それ故、他人から信用されている<sup>2)</sup> 全くの善人である。そのように理想に生きているので、現実感覚が欠除して、政治には向いておらず、政治的決断は全て間違ってしまう。中でもアントニーという人間を全く理解できなかった点は致命的である。シェイクスピア劇に於いては、しばしば、ブルータスのように政治に向いていない人物が悲劇の主人公になっていて、政治的行動をとれないために生き残れない。例えば、ホットスパー、オセロー等が、政治的でも現実的でもないため、それぞれ名誉、恋の為に自滅するように、ブルータスも理想主義のために破滅し、どのよう

な強力な敵も必要としない<sup>3)</sup>。そこには、現実を直視することの重要性が示唆されている。

先ず、キャッシアスとキャスカが、シーザーは危険だから暗殺すべきだと主張することから始まる。ブルータスは、二者択一を迫られて苦悩する。一方で、ローマのためにシーザーの独裁政治を拒否するという政治的理想主義に生きようとしながら、他方で、親友であるシーザーを暗殺する決心をすることができずにいる。つまり、正しいと信じている独裁拒絶という政治倫理に背を向け、キャッシアスとの協力を拒否し、シーザーとの友情を大切にして、独裁政治を許すか、それとも、キャッシアスと手を組んでシーザーとの友情を裏切って暗殺するしかないのである。彼が全く善良であるが故に、政治上の理想と友情の板挟みになり、どちらも受け入れることができない。その板挟みの苦悩から逃れようとして、健康な判断力を失ってしまう。

注意すべきことであるが、抽象的に理想を求めるブルータスの思考過程には、一つの重大な欠点がある。それはキャッシアスを信じてしまっただけで、確かな証拠のない仮定から、暗殺計画を始めていることだ。現在のシーザーは独裁者の卵であって、いずれは危険な蛇、つまり、独裁者になるとブルータスは確信しようとしているが、そのことについて何の確証もなく、単なる仮定であるのに、事実として決めつけていることである。さらに悪いことに、現実から確証を得ようと努力さえもしないで、未来においてシーザーは独裁者になるだろうという仮定あるいは幻想をもとに、シーザー暗殺という重大な決意をしたことになる。

だからシーザーを蛇の卵であると思え。  
本性として、孵ったら有害なものになるだろうから、  
卵の内に殺せ。  
And therefore think him as a serpent's egg,  
Which hatched would as his kind grow mischievous,  
And kill him in the shell. 2.1.32-4.

ここで注意すべきことは、善人ブルータスは、権力を得たいがために自己を正当化しているのではなく<sup>4)</sup>、ただ不可能に近い二者択一を迫られる苦しみから逃れようとして、シーザーについて独裁者、蛇という虚像を作り上げ、think, killという風に自分自身に命令せざるを得ない状況に陥っている、つまり、無理に自分をそう思うように強制している点である。命令法で書かれたこの二つの

語は、二者択一の苦しみから、暗殺という行動の中に逃避しようとしているブルータスの心痛を浮き彫りにしていると言える。逃避するために自らに命令を下しているのだ。

だから、追い詰められて暗殺を仕方無しに決意した後でも、友人シーザーを殺さないで独裁者シーザーだけを倒して、政治上の理想と友情の両方を捨てないで行ける方法を、考え出そうと、未だ無駄な努力を続ける<sup>5)</sup>。本来、善人であるので血を流すことを嫌っている。だから、血を流さない暗殺を彼は探し求める。しかし、そのような方法がある筈がない。従って、儀式の衣に包んで、殺人を正当化しようとするが、その儀式も無意味で空虚である。雄弁でもって、自らの良心の声を封じて、キャッシアスに次のように語って、現実から逃避しようとする。

屠殺者ではなく、犠牲を捧げる者になろう、ケイアス、  
シーザーの精神に反抗するのだ。  
人の精神には血はない、  
シーザーの精神だけをつかまえて、  
[肉体を]切り刻まないようにできればいいのだが、  
残念だが、シーザーは血を流さねば、優しい友人達よ、  
大胆に彼を殺そう、だが怒りからではなく、  
神々への捧げ物として切ろう、  
獵犬にやる死肉として切ってはならぬ。  
Let us be sacrificers, but not butchers, Caius,  
We all stand up against the spirit of Cæsar,  
And in the spirit of men there is no blood:  
O, that we then could come by Cæsar's spirit,  
And not dismember Cæsar! But, alas,  
Cæsar must bleed for it! And gentle friends,  
Let's kill him boldly, but not wrathfully;  
Let's carve him as a dish fit for the gods,  
Not hew him as a carcass fit for hounds: 2.1.166-74.

このように心から信じていないことを、自分自身と暗殺者達に信じ込ませようとしているのであるから、そこには無理がある。無理があるから、ブルータスの苦悩は深まるばかりで、眠ることができなくなる。しかし、独裁を許さないという最高の政治目的のためにシーザーを生贄として殺すのだというふうな、現実逃避、自己欺瞞によって初めて陰謀に加わることができ、屠殺者ではなく、神々に生贄を捧げる者と自分を正当化して初めて暗殺することができる。自己欺瞞によって、自己を正当化しなければ、彼はどのような行動も取れない。

だから、シーザー暗殺後、儀式として手を血に

浸そうと、ブルータスは暗殺者達に言う。しかし、彼自身暗殺の中に宗教性を全く感じていないのであるから、儀式と言っても宗教的な意味は全く感じられない。皮肉なことに、シーザーの方は殺される時、ブルータスの動機を宗教的、政治的なものとは理解していなかった。ブルータスが剣を手にして近付いてくるのを見て、「ブルータス、お前もか。E tu, Brute? (3.1.77.)」という絶望の言葉を残して倒れる。これは、シーザーが宗教的罪あるいは政治理念の次元ではなく、個人的信頼とか友情の次元での裏切りと見なしていることを明確に示している<sup>6)</sup>。後でアントニーが追悼演説の中で指摘しているように (3.2.186)、シーザーにとって暗殺は、ブルータスの忘恩 (ingratitude) だったのである。これはシェイクスピアが最も嫌っていた人間の本性である。さて、ブルータスはキャッシアスに、

だから我々はシーザーの友だ、死を怖れる時間を短くしてやったのだから。  
So are we Cæsar's friends, that have abridged  
His time of fearing death. 3.1.105-6.

と述べて、いずれ人は死ぬことだし、人を殺すということは、その人の死の恐怖の時間を短縮することになるのだから善だとする。これも見事な欺瞞であるが、殺人の正当化の最も説得力のあるものかも知れない。

ブルータスは初めから終わりまで間違っている。『恋の骨折り損』で、シェイクスピアは、学園ではなく、人生そのものの事実の中でのみ、知性と情熱によって人生を学ぶことができると断言している。ブルータスは、抽象的な思考によって、現実から遊離していった。シーザーが自分をシーザリズムの代表者として理想化していたように、ブルータスも自らを完璧な道徳の追求者と見なしていた。そして、周囲の人々もそのように見ていた。それは危険なことでもあった<sup>7)</sup>。なぜなら、現実から遊離した証拠のない仮定に端を発した影のように実体を持たない抽象的な思考過程によって、ブルータスはシーザー暗殺という犯罪を犯すような結果になったからである。

### 一流の役者マーク・アントニー

マーク・アントニーは理想主義者ブルータスと

対照的で、登場人物の中で最も情熱的で、主義というものを持たない<sup>8)</sup> 複雑な人物で、衝動的であると同時に計算することができ、暖かい心を示すかと思えば冷淡になり、貴族でスポーツマンであると同時に群衆を扇動することもできるカメレオンのような人物である<sup>9)</sup>。彼は群衆なしの政治権力があり得ないこと、その群衆は無知で簡単に操作できるのでそれだけ危険でもあることを、よく承知している。実際、群衆の心理を良く理解し、操作することに秀でていて、群衆を暗殺者達に寝返るように仕向け、内乱へと導いて行く。

シェイクスピアは示すことだけでなく、隠すことにも優れた才能を発揮し、アントニーがこの劇の中心となる登場人物であるのに、劇の前半には彼を殆ど登場させない。シーザー暗殺直後、勝ち誇った暗殺者達に直面するまで、僅か33語しか語らせない。彼を dark horse として意識的に隠しているのである<sup>10)</sup>。また、「能ある鷹は爪を隠す」という諺通りに、ハル王子と同様に、マーク・アントニーも、実際の叡智から生まれる指導力を持っていることを意識的に隠している。

アントニーがシーザー暗殺の知らせを受け取った時、シーザーの腹心であった自分が一番に暗殺者達に狙われるに違いない、どうしたら彼等の刃を逃れることができるか、逃亡しても捕らえられて殺されるだろうと想像し、そのような状況の中で生き延びるためのシナリオを彼は作ったに違いない。先ず第一に、ブルータスが彼の身の安全を保証し、シーザー刺殺の理由を説明してくれば、ブルータスに従うという、冷静に考え出された伝言を持たせて、彼のもとに使者を送る(2.1.122)。これが劇の転換点である。身の安全を確保できたと知るや、暗殺者達の前に姿を現わし、ブルータスの挨拶を無視して、彼を圧倒する。普通の人間であれば、殺傷と奪の力を持つ人間に対しては、おそろおそろ挨拶を返すのが普通であろうが、彼はそうしなかった。いきなりシーザーの死体の前に跪いて、巨人が小さくなったことを嘆き、死を悼み、「立派な」暗殺者達の手にかかって死ぬことは最高の幸せだと言う。自分のために書いたシナリオに全て従ってきわどい演技をしている。暗殺者達を前にしての彼の第一声は、次のように大胆なものである。

おう、偉大なるシーザー、哀れにも倒れておられる。  
あらゆる征服と栄光と勝利と戦利品が

こんなに小さくなってしまわれた。お別れだ。[立ち上がる。  
(中略)

これから千年生きようと  
今程死に相応しい時はないだろう。  
これ程望ましい死に場所も死に方もなからう、  
ここシーザーのそばで、君達に切られるのだから、  
この時代で最も偉大な精神の持ち主である君達にだ。  
O mighty Cæsar! dost thou lie so low?  
Are all thy conquests, glories, triumphs, spoils,  
Shrunk to this little measure? Fare thee well.

[he rises

Live a thousand years,

I shall not find myself so apt to die:  
No place will please me so, no mean of death,  
As here by Cæsar, and by you cut off,  
The choice and master spirits of this age.

3.1.149-51, 160-4.

グランヴィル・バーカーは、こうしたアントニーの行動を次のように解釈している。アントニーは自分の生命を危険に曝しながら感情に身を委ねて、シーザーの死を深く嘆き悲しむ。彼の力の一つには衝動あるいは感情に身を委ねることの中にある。哲学者ブルータスにはそれができない。その率直さが彼を救ったとも言える。暗殺者達がそれで心を動かさなかったら、彼はその場で直ちに殺されていたであろう。芸術家の持つ幸せな向こう見ずによるのである。これ以外に暗殺者達の剣を避ける方法はなかったと<sup>11)</sup>。しかし、バーカーが主張するように、アントニーは「芸術家の持つ幸せな向こう見ず」という一種の感情に身を委ねたのであろうか。実はそうではなく、ただそのように見せ掛けただけであって、彼の捨身の演技であったのではないだろうか。その後、アントニーはシーザー殺害の理由も聞かないうちに、暗殺者一人一人と念の入った握手をし、市民の前で追悼演説をする許可を願い出て、ブルータスからそれを取り付けている。そのような一連の彼の理性的な行動から、バーカーが主張するように、彼が感情に溺れ、「芸術家の持つ幸せな向こう見ず」の状態にいたとは、到底考えられない。

さて、リチャード3世が復讐心に燃えるアンに剣を渡して、私を殺すか、とるかと言って迫る場面があるが、さあ殺せと言われると殺せなくなるのが人間の心理である。アントニーも、その心理を読んで、利用している。大胆で優れた役者である。自分の命をかけた危険の中に身を置きながら、迫真の演技をしている。次の演説の場面では、群衆の心理を知り尽くしてそれを利用して

るように、ここでも暗殺者達の心理を読んで利用している。知っている段階で止まらないで、それを利用して点で、彼は優れた役者である。中野好夫はその人間共通の心理を「天邪鬼」という見事な言葉で説明している<sup>12)</sup>。更に、この「天邪鬼」という心理と共にアントニーが利用したものは、感情の強力な伝播力である。

暗殺者達が去って、彼が唯一人取り残され、初めてシーザーが殺されたことの悲痛な心情を吐露する。それ迄彼は自制していたと考えられる。自分が「屠殺者達 (butchers)」の言いなりになっている自分を責め、シーザーの遺骸に向かって詫びるのである。ブルータスが「屠殺者」(2.1.166.)にはなるまいと言ったことが思い出されるのであるが、ブルータスは結局「屠殺者」になったのである。そうしているところに、オクティヴィアスの召使が登場し、シーザーの死体を見て涙を流す。それを見て、アントニーは次のように言う。

悲しみはうつっていくようだ、俺の目も  
お前の目に悲しみの涙を見て、  
濡れてきた。  
Passion I see is catching, for mine eyes.  
Seeing those beads of sorrow stand in thine,  
Began to water. 3.1.283-5.

シーザーの死体が召使の涙を、召使の涙がアントニーの涙を、彼の涙が広場の群衆の涙を誘うことになる<sup>13)</sup>。ブルータスのように理性によって回りくどい説明をするのではなく、彼はそうした感情の伝播力を計算し、利用して、群衆の感情に直接訴えて群衆を動かす作戦に出る。この点でも彼は真の役者である。感情に呑まれることなく、感情を利用してからである。群衆を動かすために、政治家は絶えず演じなければならない<sup>14)</sup>。

### ブルータスとアントニーの追悼演説

性格的に単純で、人を信用しやすい善人ブルータスは、アントニーに、追悼演説をシーザーの死体の前でしたいと、何気なく頼まれて承諾するが、疑い深いキャッシアスはアントニーが演説を利用するかも知れないとして、それに本能的に危険を感じて反対する。しかし、ブルータスは短い争いの後、キャッシアスを押し切って、アントニーに許可を与える。全てアントニーのシナリオ通りに、事は進行して行く。

問題は、どちらの演説が群衆に訴える力を持ち、どちらが勝つかになってくる<sup>15)</sup>。ブルータスは、自分が先に、アントニーが後に演説するという不利な順番を、彼自身が決める。不利だということにさえ気付いていない。その上、彼の散文による演説は、論理的、理性的、抽象的、形式的で、透徹して、思慮深く、誠実な学者が使うような均整のとれた文体で語られてはいるが、聴衆の心理を読んでおらず、冷静に彼らの知性に訴えようとし、感情に直接訴えるところがなく、聴衆の感情の伝播力に訴える韻文によるアントニーの演説に太刀打ちできない。

もしその時その友が何故ブルータスは  
シーザーに反抗して立ち上がったのかと問えば、私の答え  
はこうだ。  
シーザーを愛さなかったのではなく、ローマを彼以上に愛  
したからだ。シーザーのみ生きて万人が奴隷として死ぬ  
のを  
望むか、シーザーを殺して万人を自由に生かすよりも、  
シーザーが  
私を愛してくれたことを思うと涙が出る。シーザーが幸せ  
だったと  
思うと私も嬉しい。勇敢なシーザーを尊敬するが、野心を  
持つようになった  
シーザーを私は殺した。

If then that friend demand why Brutus  
rose against Cæsar, this is my answer: not that I  
loved  
Cæsar less, but that I loved Rome more. Had you  
rather  
Cæsar were living, and die all slaves, than that  
Cæsar  
were dead, to live all free men? As Cæsar loved  
me,  
I weep for him; as he was fortunate, I rejoice at it;  
as he was valiant, I honour him; but as he was  
ambitious,  
I slew him. 3.2.20-7.

哲学の授業で学生と推論しているような、この空疎な演説から、ブルータスが群衆を理解していないことが明らかである。彼は群衆も彼と同様に理性で動き、自由を求めていると考えているが<sup>16)</sup>、それは誤解である。実際は、群衆は、ブルータスが想像したように自由を求めていた訳ではなく、法を制定して、日常生活の秩序を保ってくれる支配者を求めていたのである。

その直後に行われるアントニーの演説は、具体的であって、テンポが速く、情熱に溢れ、韻文で書かれ、重要な語句が繰り返され、直接群衆の感

情に訴える力を持っている。ブルータスの演説とは対照的である。

アントニーは演壇に立って、先ず、何故公衆の面前に立っているか、その理由について語り、シーザーを埋葬するため、誉め讃えるために来たのではないと言う。

友よ、ローマ市民よ、同胞諸君よ、耳を貸してくれ。  
私が来たのはシーザーを弔うために讃えるためではない。  
Friends, Romans, countrymen, lend me your ears;  
I come to bury Cæsar, not to praise him; 3.2.74-5.

彼は本心を語っていない。彼が来たのは、実際はシーザーの偉大さを公衆に示し、ブルータスに復讐するためである。群衆がブルータスを信じ切っている最初の段階では、シーザーを賞賛しようとする意図が見えようものなら、アントニーは直ちに殺されていたであろうから、彼は自分の真の意図を悟られないように、細心の注意を払って隠す<sup>17)</sup>。アントニーが密かに心に描いていたシナリオは、入念に考え出されたものであった。「高潔な (noble)」「尊敬を受けるべき (honourable)」「誠実な (faithful)」「公正な (just)」などの形容詞を繰り返し使って、ブルータスの理想主義と彼の人格を、あたかも賞賛しているかのような印象を与えることに成功している。本心では、「殺し屋 (butchers)」の一人と見なし、復讐しようとしているのに、考えていることと言っていることが全く逆である。ブルータスは演説の中で、シーザーが野心を持ったから暗殺したとしているが、具体的に例を挙げて説明せず、抽象的な演説で終わっている。アントニーはそれに対して正面切って反対し、ブルータスを断罪するような、愚かで短絡的なことはしない。ブルータスを賞賛する形容詞をしつこく繰り返し使いながら、シーザーが実際にやったことを例に挙げて、アントニー自身の判断を意図的に隠しながら、群衆に判断させる。捕虜からの身代金を全てローマに納めたこととか、貧しい人々に同情して涙を流したとか、三度王冠を戴くことを拒否したことなどである (3.2.88-99)。抽象的な議論ではなく、具体例そのものが説得力を持つことを彼は良く知っている。

彼は多くの捕虜をローマに連れ帰ったが、  
身代金で全て国庫を満たした。  
このことでシーザーは野心を持っているように見えるか。

貧しい人々が泣いた時、シーザーも泣いた。  
野心とはもっと無情なものでできているものだ、  
だがブルータスは彼が野心を持っていたという、  
そしてブルータスは尊敬すべき人物だ、  
全ての諸君は見たらう、ルーパーカルの祭に、  
私が三度王冠を彼に差し出したが、  
彼が三度拒絶したのを。これが野心だったのか、  
だがブルータスは彼が野心を持っていたという、  
確かにブルータスは尊敬すべき人物だ。

He hath brought many captives home to Rome,  
Whose ransoms did the general coffers fill:  
Did this in Cæsar seem ambitious?  
When that the poor have cried, Cæsar hath wept:  
Ambition should be made of sterner stuff:  
Yet Brutus says he was ambitious;  
And Brutus is an honourable man.  
You all did see that on the Lupercal  
I thrice presented him a kingly crown,  
Which he did thrice refuse: was this ambition?  
Yet Brutus says he was ambitious;  
And, sure, he is an honourable man. 3.2.89-100.

シーザーの政治を例証して再現することにより、彼が野心を持っていなかったことを立証しつつ、同時に尊敬すべきブルータスは、そのように正しいシーザーが野心を持っていたと言っていると、まるで呪文のように繰り返す。このようにして暗殺の正当性を確実に一つずつ突き崩して行きながら、暗殺をした当のブルータスを尊敬に値する人物だと、自分の判断を隠して、逆の表現をすることにより、群衆に矛盾を強烈に感じさせ、怒らせる最も巧妙な方法を取っている。彼は見事にシーザーに栄光を与え、暗殺者達の評価を下げ、冷酷さを強調する<sup>18)</sup>。「おう、判断力よ、お前は野獣の所に逃げて行ってしまい、人間は理性を失った。O judgement! thou art fled to brutish beasts/ And men have lost their reason. (3.2.105-6.）」という台詞の brutish beasts は、音の連想で、アントニーは意識してブルータスを野獣であると暗示しているのかも知れない<sup>19)</sup>。

次にアントニーはシーザーの遺言状を持ち出し、直ぐに示したい気持ちを隠して、「許してほしい、それを私は読むつもりはない、Which, pardon me, I do not mean to read— (3.2.132.）」と言って、隠すことで群衆を焦らし、その内容をどうしても知りたいと思う心を煽る。読むつもりが本当に初めからなければ、遺言状を見せることはないのである。群衆が更に示すように迫り始めると、「落ち着いてくれ、諸君、それを讀んではならないのだ。Have patience, gentle

friends, I must not read it; (3.2.141.)」と彼等の要求を押し止める。護民官マラスの「お前達木の塊め、お前達石め、感覚を持たない物より悪い奴め You blocks, you stones, you worse than senseless things! (1.1.39.)」という民衆に対する悪態とは対照的に、彼は群衆を「木石でなく人間である You are not wood, you are not stones, but men; (3.2.143.)」と先ず褒めておく。貶すよりも褒める方が群衆を動かしやすいと知っての上のことである<sup>20)</sup>。そのように、人間の心を持っているから、諸君が遺言を読めば怒り狂うようになるであろう、だから、読んではいけないと言う。‘do not mean’ から ‘must not’ へと、禁止の度合いを強めてきている。読んではならないと禁止されればされる程、内容を知りたくなるのが、天邪鬼という人間性である。群衆の天邪鬼を最大限に利用するために、内容そのものを隠そうという姿勢を故意に強めて見せるのである。このように、群衆は、完全にアントニーの手中にあって、知らずに操られ、激昂の一途を辿るのである。彼は語るだけでなく、逆に、隠したり、躊躇したり、遮ったりして、群衆を見事に操っている。

我慢してくれないか。暫らく待ってくれないか。  
それ(シーザーの遺言)について語ったのは行き過ぎだった。  
尊敬すべき人々に悪いことをすることになるのではと恐れる、  
シーザーを刺し殺した人達に、それを恐れる。  
Will you be patient? will you stay awhile?  
I have o'ershot myself to tell you of it:  
I fear I wrong the honourable men  
Whose daggers have stabbed Cæsar; I do fear it.  
3.2.150-3.

ここで完全に勝負あったというところである。さらにアントニーは聴衆の想像力に訴えて、最後の止めの最も効果的な演技をする。群衆をシーザーの死体の周りに集め、暗殺されたシーザーの血のついたマントを高く掲げ、深く刺された死体のそれぞれの傷口を示しながら、暗殺者の一人一人の剣がどこを刺したか説明する。しかし、良く考えてみると、アントニーは暗殺現場にいなかったから、何処を誰が刺したか、分かる筈がない。しかし、彼は群衆の想像力に訴えて、暗殺の状況を細かく再現することによって、暗殺者達のシーザーへの一刺し一刺しを、群衆の一人一人の身体に感じさせることに成功したのである。シーザーの傷

を群衆個々人の傷と感じさせ、暗殺者を反逆者にかえた(3.2.255.)<sup>21)</sup>。そのように血に染まったマントを見せてから、今度はそれを身に着けていた、シーザー自身の死体そのものを見せる。彼は見せるものの順序にも配慮している。シーザー暗殺を劇的に再現してみせるという明確な目的のために、あらゆる巧妙な工夫をしているのである。シナリオは完全に演じられ、最高の効果が得られる。

更に、アントニーは、自分が演説に必要な資質や才能を持っておらず、雄弁でないと主張するが、実際は雄弁である。ブルータスも雄弁ではあるが修辭的である。アントニーは、雄弁でないとふりをして、雄弁であることを隠す。それもまた巧みな話術である。

私はブルータスのように雄弁ではなく、  
諸君も知っているように、ただの鈍感な男で  
私の友人を愛しているだけ。彼らはそれを良く  
知っていたので、  
公の場で彼について語るのを私に許したのだ。  
血を沸き立たせる機知も、言葉も、値打も、  
行動力も、弁舌も、説得力も  
ない。ただ普通に語るだけ。  
諸君自身が知っていることを語るのだ。  
I am no orator, as Brutus is;  
But, as you know me all, a plain blunt man,  
That love my friend; and that they know full well  
That gave me public leave to speak of him:  
For I have neither wit, nor words, nor worth,  
Action, nor utterance, nor the power of speech  
To stir men's blood: I only speak right on;  
I tell you that which you yourselves do know;  
3.2.218-25.

アントニーが追悼演説で実際にやったことを整理してみると、次のようになる。

- (1) 群衆にシーザーを賞讃しないようにと言いながら、賞讃するように仕向ける。
- (2) ブルータスを尊敬すべきだと言いながら、それに疑いを抱かせるようにする。
- (3) シーザーが野心を抱いていたという暗殺理由の正当性を否定しないように言いながら、繰り返し否定している。
- (4) 内乱を怖れると言いながら、内乱を誘発している。
- (5) シーザーの遺言を読むことを拒否しながら、結局その内容を公表している。
- (6) ブルータスよりも演説が下手だと言いながら

ら、実際には、遙かに優れている。

以上に示したように、アントニーの言っていること (appearance) は、彼の意図や群衆を動かして行く方向 (reality) とは、全く逆である。

一方、群衆はアントニーに操られているとは知らず、独力で反乱に立ち上がったと信じている<sup>22)</sup>。ブルータスとキャシウスが逃亡し、彼等に操られていた不安定であった暴徒が、今度はアントニーに扇動されて暴動を起すことが明らかになった時、彼は意地悪く身を引く。

成り行きにまかせよう。災いめ、立ち上がったぞ。  
好きな所へ行け。  
Now let it work. Mischief, thou art afoot,  
Take thou what course thou wilt. 3.2.262-3.

更に3幕の演説の場面が終わると、4幕1場は不愉快な恐怖の場面である。政治とはこのように非人間的で冷酷な一面をもっているのだろう。アントニーはオクティヴィアスと誰を処刑するか相談している。シーザーの死に涙を流したアントニーが、今度は自分の甥を殺すことに易々と同意する<sup>23)</sup>。このことをとって見ても、既に触れたように、アントニーは複雑な登場人物であることが分かる。

## 結 論

追悼演説に見られる弁舌術を中心に、何故、ブルータスは潮に乗れずに自殺して果て、それに反して、アントニーは、何故、潮に乗ってローマを支配することができるようになったか、その原因を明らかにした。アントニーは、現実を直視し、人間性を観察することによって、彼自身、そして、人間一般を知り尽くしていたから、彼の弁舌術は完璧であった。その彼の弁舌術が成功し、ローマの群衆を動かすことができたのは、それが人間性の理解の上に立ったものであったからである。群衆にただありもしないことを、あったことのように思わせ、嘘を吐いたのではない。そうであったなら、最後に潮 (the tide) に乗ってローマの群衆を支配することが出来ず、ブルータスのように自殺して果てていたであらう。アントニーの基本的な態度は、あくまでも真実を真実として、在るものを在るがままに示すことである。基

本的に彼は素直で率直で誠実である。彼はブルータスと違って、主義主張を持たないから、それに縛られることがない。それゆえ、彼は現実を歪めることなく、直視し、観察し、そこから得たものを利用して弁舌をふるった。理想主義に縛られたブルータスと異なり、アントニーの弁舌が成功した理由はそこにある。

S.O.

## 註及び文献

- 1) Harley Granville-Barker, "Mark Antony," *Shakespeare: Julius Cæsar (Casebook Series)*, ed. Peter Ure (Macmillan, 1979), 234.
- 2) A. C. Bradley, *Shakespearean Tragedy* (Macmillan, 1964), 81-2.
- 3) Maurice Charney, *All of Shakespeare* (Columbia University Press, 1993), 233.
- 4) Jonathan Dimbleby, "Julius Cæsar," *Shakespeare in Perspective, Vol. 1*, ed. Roger Sales, (British Broadcasting Corporation, 1984), 59.
- 5) John Wilders, *New Prefaces to Shakespeare* (Basil Blackwell, 1988), 138.
- 6) Wilders, *op.cit.*, 139-40.  
Sean Lucy, *York Notes: Julius Cæsar* (Longman York Press, 1990), 74.
- 7) Edward Dowden, *The Tragedies of SHAKESPEARE* (Oxford University Press, 1962), 471-2.
- 8) Lucy, *op.cit.*, 78.
- 9) Granville-Barker, *op.cit.*, 238.
- 10) *Ibid.*, 234.
- 11) Granville-Barker, *op.cit.*, 235.
- 12) 中野好夫 『シェイクスピアの面白さ』 新潮社 1967年 54-5.
- 13) Granville-Barker, *op.cit.*, 237.
- 14) Dimbleby, *op.cit.*, 60.
- 15) *Loc.cit.*
- 16) Wilders, *op.cit.*, 141.
- 17) しかし、アントニーは終幕で、ブルータスの自殺の報に接して、他の暗殺者と異なり彼だけは私欲に惑わされないう高潔な人 (the man) であったと高く評価しているので、この時点で全く心にもないことを語っているとも言い切れない。
- 18) Victor L. Cahn, *Shakespeare The Playwright* (Praeger, 1996), 60.
- 19) *Ibid.*, 60-1.
- 20) *Ibid.*, 61.
- 21) *Loc.cit.*



22) Wilders, *op.cit.*, 141.

23) *Ibid.*, 142.

---

## Abstract

The earliest comments in the critical history are on the style of the play. In 1601, John Weever praised Antony's skill in converting the Roman citizens' sympathy for Brutus into antipathy in his funeral speech, and in 1784, Thomas Davies likewise noted Antony's persuasive techniques and employment of hesitation and interruption. Antony's skill has since then drawn a number of commentators' attention. In this paper the rhetoric of his famous funeral oration will be further analyzed, compared with Brutus', in relation to human nature. Other celebrated commentators, such as A. C. Bradley, D. Wilson, J. Wilders, M. Charney, V. L. Cahn, and S. Lucy will be referred to.

---

受付日 2006年10月30日

受理日 2007年1月12日